

『第二幕 妖々夢異変』

レイムが訪れたのは妖々夢の異変世界。ここでは妖怪桜、西行妖が満開になったために、死者と生者が逆転してしまっていた。

桜吹雪が舞う景色。光琳堂からレイムが外に出ると、いつの間にか死に装束姿だ。しかも、サナエやアキユウは足が無くなり、幽霊になってしまっていたのだ。

何事かと思い、近くで聞いた噂を聞くと、どうやら生きた物が死に、死者が肉体を取り戻しているらしい。

「なるほど…大体分かったわ」**・敏樹**

と言つと、レイムは一直線だ、ひときわ大きな桜が見える、屋敷を目指し歩き出した。

道中では生き返った死者達が、酒を飲み交わし宴会の体を成している。死んでは得られない喜びを感じる彼らに、サナエは「こんな異変なら、ちょっとの間起きてても良いかもしれませぬ」**・敏樹**。

だが、レイムは「死者は死んでいるべきだ」と冷たくあらしい歩調を早める。

開かれた門を抜け、果てしなく続く階段を上っていくと、それを止める者がいた。紺白ヨウムだ。

「周りが騒がしいと思ったら、生きた人間が、なぜ死者になつていないか」

そう問う彼女に、レイムは「さあてね。悪魔だから、じゃないかしら」**・**と笑みを浮かべ返す。

一触即発かと思われたが、二人の間に白玉楼の主、西行慈ユコが仲裁に入った。

場所は白玉楼客間へ。

ユコは、この桜はもうじき散り始める。そうすれば異変も終わるから、それまで待つてくれないか、とレイム達に提案する。

話を聞いたレイムは、アキユウやサナエに言われ、それなら少し待つと返事をする。一同光琳堂へ。

去った後「本当にそれでいいのか」とヨウムは問うが、ユコは微笑みだけで何も返さなかった。

門まで送る、とヨウムはさう言つて一緒に階段を下っていく。アキユウは二本の刀に注目、「随分長さが違うんですね」とかなんとか「と問いかけろ。」

楼観剣と白楼剣の説明。そして、自分は白楼剣を全く使えない(鞘から抜けない?)ことを告げる。

先代の話では、この剣は見えない物を切る剣らしいのだ。だが自分は一体何を切るのか、それが分からないと言う。

西行桜まで向かったユコは、木の幹に触れると、桜を散らせようとする。

だが、その時だった。「再び死んでたまるか」という声と共に、ユコの意識は消え、西行桜は更に花をつけ始める。

それを見たレイム、ヨウムは桜の元へ。そこには桜の前に立ち、虚ろな目をして立っているユコの姿があった。

「ささと入し折っておくべきだったわね」、そう言つて変身するレイムを一瞥すると、ユコはヨウムに「この桜は散らせない。邪魔する者は始末しろ」と命じる。

迷つヨウム。レイムは構わず西行桜に攻撃を仕掛けるが、楼観剣で切り落とされてしまう。

「あなたの主は、その妖怪桜に操られてるだけ」、とレイムは言つが、ヨウムは構わず攻撃を開始。白玉楼門前までレイムを押し込む。

「桜の力とはいえ、あれはユコ様の本音だ。操られているとはいえ、あれはユコ様の言葉だ!」

「ってんじゃないわよ! この石頭!」
満開の桜をバックに次回。

胡蝶の弾幕を一振りでかき消すと、続けるLASを発動。一閃でココと西行妖を両断する。

「あしがいつかまた」

ココと並んで頭を下げるヨウムに、世界の破壊者に頭を下げるな、と照れ混じりにレイム。

だが、ヨウムは真面目な表情で「確かに貴女は破壊者だった。けれど、それが私たちを救ったんだ」と返す。

益々照れたレイムは、適当に相づちを打つと、振りけり別れを告げる。

「いつかまた会えるか?」「そう問うヨウムに。」「きっと、世界が救われた後だね」

そう返事をして。

光琳堂に帰ると、アキユウやサナエが生者に戻り、嬉しそうに桜餅を頬張っていた。

生きている者しか味わえない喜びか。そう思いながらレイムも餅に手を伸ばした時、新しい世界のスクリーンが映し出される。

雲と岩と、緋色の光。

次の世界は、緋想天だった。

【NEXT→緋想天の異変世界】